

平成19年度「専修学校教育重点支援プラン」成果報告書

事業名	「自ら主体的に学ぶ姿勢の学生」をつくる教員の教育力向上プログラムの開発		
法人名	学校法人 穴吹学園		
学校名	専門学校穴吹医療カレッジ		
代表者	理事長 穴吹 キヌエ	担当者 連絡先	企画部 部長 伊藤 慎二郎 TEL 087-823-5700
<p>1. 事業の概要</p> <p>専門学校卒業者は、まじめで熱心に働くが、大卒者に比べて「保守的傾向が強く挑戦的でない」とか、「専門的知識・技術に固執する傾向が強い」との指摘を受けがちである。本事業では、専門学校教育に体験学習・グループワークを積極的に取り入れることで、学生の主体的な学びのスタイルを引き出すための教員の教育力向上のための研修プログラムと教材の開発を行った。具体的には、小学校や中学校において、子ども一人ひとりの考える力や、生徒間・生徒と教員間に信頼できる豊かな人間関係を作るために効果が認められている「ラボラトリー型体験学習」に着目し、今後専門学校に取り入れるために必要となる体験学習やグループワークの企画、運営に関する様々な手法や、コミュニケーションやファシリテーションのスキル向上のための研修プログラムと教材の開発を行った。</p> <p>2. 事業の評価に関する項目</p> <p>① 目的・重点事項の達成状況</p> <p>本事業の目的は、グループワークや体験学習を専門学校に取り入れることで、学生の受身の学習スタイルを主体的なものに変革できるように教員の教育力を向上させることにある。そのために、教員が学生たちにグループワークを実施したり、その体験から学んだりできる資質としての教育力（ファシリテーション能力）を育成するための指導書や研修プログラム、実施支援ツール等の開発を行った。</p> <p>事業実施にあたって行ったヒアリング調査や教員アンケートでは、多くの教員がグループワーク・体験学習に興味を持ち、自身のファシリテーション能力を高めたいと考えていることがわかった。教員は高い専門性と情熱を持って教育に取り組んでいるが、コミュニケーションを含めた人間関係やキャリア教育に対しての知識、技術、経験が少なく、授業の内外を含めて学生への対応に懸念を生じていることや、グループワークを円滑に進ませるために教員としてどのようにグループに接すればいいのかについて常に考えてはいるものの、効果的な手段などを見いだすことに困難している。さらに、グループ活動を好まない学生をどのようにしてグループになじませる手法があるのかわからない、事例集のような教材を作成し、たくさんの成功のプロセスを教員に見せて、教員に自信を持たせる必要があるといった調査結果が出ている。</p> <p>このため、今回開発した教員向け指導書は、「ファシリテータガイドブック」というタイトルが示すように、ラボラトリー方式の体験学習について解説すると共に、ファシリテータがどのような視点を持ち、どのように受講者（学生）に働きかけていくかについて丁寧に解説することを心がけた。</p> <p>1月末に実施した教員研修会（実証研修）は、参加した教員が「ラボラトリー方式の体験学習」に関わる諸理論を習得し、教育の現場で体験学習のファシリテーターとして、あるいは学生に対してファシリテーター的な関わりができるスキルを身につけることを目的として実施した。3日間という限られた時間の中でファシリテータ役を体験できた教員は26名中8名であったが、メンバーチームの教員には「グループワークを教育現場に導入し、活用する」ことをグループで検討する「会議ファシリテーション」を演習として行い、それぞれ研修で学んだこと、現場に向けての課題を明確にするという構成にした。ファシリテーター体験チームの8名全員が「ファシリテーターとしての学びを得た」との感想を持ったのに対し、体験できなかった教員からは「グループプロセスの理解」や「意見集約の過程を学べた」、「今後頑張ろうという意欲がわいた」という声はあったが、ファシリテーションについての学びや印象の声があまり聞かれなかった。</p>			

このことから、今回の取り組みはグループワーク・体験学習自体の理解や、メンバーとしての体験、導入に向けて、教員自身をもっと学びたいというモチベーションを向上させることには非常に高い効果があったが、今後よりいっそう教員のファシリテーション能力を高めるためには、教員自身がファシリテーターとなってグループワークを運営する体験を多く持つことが必要であることがわかった。そのため、定期的に、繰り返しファシリテーションを学ぶ機会を作ることや、その研修に参加するための時間の確保、自校に戻ってからも教員同士が学び合う機会を作るなど、導入に対する学内のコンセンサスをいかに得られるかが今後の課題となる。

②事業により得られた成果

調査結果を基に、ラボラトリー方式の体験学習を教員が理解し、実践することを目的とした以下の開発を行った。

1)ラボラトリー方式の体験学習実施に向けたファシリテーターガイド

体験学習を促進するファシリテーション能力、「気づき」、「分かち合い」、「解釈する」、「一般化する」、「応用する」、「実行する」の6つの基本的機能を理解するための理論や研修プログラムの例、実際に使われているツール(学生に配布されるシート類)の使い方などを解説した教員用指導書。

2)グループワーク・体験学習実施支援ツールの効果的な使い方

グループワーク・体験学習でグループの意見を集約したり、過程を記録したりすることで、グループワークのより効果的な実施を支援するために利用できるサポートツールの解説書。

3)グループワークを学ぶ実践研修資料集(CD-ROM付き)

今回のプロジェクトで開発し、検証のために開催した「グループワークを学ぶ研修」で実際に使用された各種シート類をとりまとめた資料集。

4)「自ら主体的に学ぶ姿勢の学生」をつくる教員の教育力向上プログラムの開発 総括報告書

専門学校ヒアリング調査、教員アンケート調査、プレ研修、実証研修の実施とその結果についてとりまとめた報告書。

③今後の活用

子どもの学力低下が叫ばれる中、専門学校で学ぶ学生たちが、学ぶことを喜びとする主体的な学び手となり、そうした教育を受けた卒業生たちが、社会の中で好奇心と向上心をもって企業の中で活躍できるよう、高度な職業教育を行う教育機関として、引き続きグループワーク・体験学習の専門学校への普及と、教員のファシリテーション能力の向上に取り組むこととしたい。

④次年度以降における課題・展開

ファシリテーションは人を育てない。人が育つのを支えるのがファシリテーションである。主体的に学ぶ姿勢の学生をつくるのは、学生であって教員ではない。教員の役目は、学生のそうした姿勢を支援することである。学生が自ら考え、自ら動き、かかわり、ぶつかり、気づき、感じ、新たな行動を試みていく、その循環を学生自身が自分のものへとしていく。こうした過程が学生の生きる力を高め、人間力を磨いていくことにつながる。教員は、それを支援することしかできない。しかし、どのように支援するかを考え、どのように行動するかを決めることはできる。教員が今ここで起こっていることに気づき、支援の行動を試みる、その循環もまた教員のファシリテーション力を高めていくことにつながると考える。

関係各位のさらなるご指導、ご支援を期待したい。

3. 事業の実施に関する項目

①ニーズ調査等

事業を推進するにあたり、以下の調査を行った。

(1)グループワークサンプリング調査(専門学校ヒアリング)

専門学校がこれまでに取り組んでいる教育の試みや問題点を把握するために、首都圏、大阪圏、名古屋圏、高松地区の4地域にある情報系、医療系、衛生系、デザイン系といった様々な分野の専門学校を直接訪問し、教員に対する聞き取り調査を行った。

実施時期と訪問先は以下の通り。

(平成19年)

8月3日 トライデントコンピュータ専門学校大阪

大阪リハビリテーション専門学校

大阪総合デザイン専門学校

8月9日 岩谷学園テクノビジネス専門学校

日本児童教育専門学校(高田馬場)

ホスピタリティツーリズム専門学校

8月21日 名古屋工学院専門学校

トライデントコンピュータ専門学校

8月28日 専門学校穴吹ビジネスカレッジ

専門学校穴吹医療カレッジ

8月29日 専門学校穴吹デザインカレッジ

受け身で主体性に欠ける、積極性が無い、他者との関わり方がうまくできないといった最近の学生の気質に対して、教員は高い問題意識を持ち、様々な創意工夫を試みるものの、試行錯誤中であつたり模索中であつたりするケースが多いことがわかつた。

(2)グループワークニーズ・実態調査アンケート(教員アンケート)

座学、演習など様々な形で教育が行われている専門学校において、グループワークがどのように理解され、導入され、実践に当たり教員がどのような課題や問題を抱えているかを把握するために、教員個人ベースでのアンケート調査を実施した。

実施時期:平成19年11月

(11月2日調査票発送、11月14日締切)

調査対象:全国専修学校各種学校総連合会に加盟している学校法人立専門学校1,619校に調査票を発送するとともに、全国専門学校情報教育協会の協力を得て同協会ホームページからも告知を行った。

回答数:回答校数231校(学校回答率14.3%)

回答教員数1,076名

短期間のうちに全国の専門学校から1,000名を超える教員の回答をいただけたことは、グループワーク、およびその指導法に対する関心の高さの現れであろう。

これらのアンケートから明確になった点は以下の通り。

① 教員は、学生が教育に対して受動的であり、学習に対する意欲も消極的であると考えており、それを改善するためにグループワークは有効な手法であると認識している。

② 教員は、グループワークを円滑に進ませるために教員としてどのようにグループに接すればいいのかについて常に考えてはいる者の効果的な手段などを見いだすことに困難している。

③ その要因として、グループメンバーの構成をどのようにするかによって教育効果や成果が大きく違つてしまつたと認識している。

④ また、グループ活動を好まない学生をどのようにしてグループになじませる手法があるのかがわからない。事例集のような教材を作成したくさんの成功のプロセスを教員に見せて教員に自信を持たせる必要がある。

⑤すでにモチベーションの低い学生に対して、どのような策を講じて上昇させていくのか？ また、前項同様にプロセスが稀少かつ不明確である。

これらの調査結果をもとに、教員が苦慮しているいくつかの具体的な観点を絞り込み、その解決方法を提案するような教育プログラム、教材を開発することにした。

②カリキュラムの開発

本事業は教員の教育力向上を目指したプロジェクトのため、カリキュラム開発は行っていない。

③実証講座

プロジェクト開始間もない時点で実施したプレ研修と、開発されたプログラム、支援ツールを活用した実証研修の2研修を実施した。いずれも、受講対象者は現場で学生を指導している教員である。

1)「グループワークを学ぶ基礎研修(プレ研修)」

予備知識のない状態で教員に対してグループワーク・体験学習を実施し、問題点や課題を明確にした。

日 時:平成19年10月15日～16日(2日間)

会 場:幕張セミナーハウス(千葉県習志野市)

参加者:18名

グループワーク、ラボラトリー方式の体験学習を実体験したことによって、グループプロセスについての理解は深まったが、教師として実際に学生に接する際のファシリテーション能力や心構えをいかに身につけるか、その理論やスタンス、技術の習得に関心が高く、教員のファシリテーション能力を向上させるプログラムの必要性を強く感じる結果となった。

2)「グループワークを学ぶ実践研修(実証研修)」

開発した指導書(教員向けガイド)や研修プログラムを検証するために、1月に3日間の日程で実証研修を開催した。

日 時:平成20年1月27日～29日(3日間)

会 場:専門学校穴吹医療カレッジ/ロイヤルパークホテル高松

参加者:26名

グループに参加するメンバーとしてだけでなく、参加者の一部(4名×2チーム)がファシリテーターを体験できるようにプログラムを構成した。体験した教員は、難しさを感じつつも、ファシリテーションに対する「学び」を得ることができたという感想を残している。

④その他

今回、学生の主体的な学びを引き出す手法として、グループワーク・体験学習の導入を軸に教員の教育力向上を目指したが、アンケートや研修会に参加した教員の教育に対する向上心の高さをあらためて感じる事ができた。多くの教員が、自らのファシリテーション能力を向上させることで、学生の持つ潜在能力を引き出し、主体的に学び続ける習慣を付けさせたいと考えている。

本事業の取り組みは、特定分野に限定されたものではなく、あらゆるジャンルの教員の教育力向上につながる内容である。引き続きグループワーク・体験学習の専門学校への普及と、教員のファシリテーション能力の向上に取り組むこととしたい。関係各位のさらなるご指導・ご支援を期待したい。